

の進歩を物語るを想へば、當事の諸氏もむしろ秘かに欣懷の禁じ得ざるものがあつたであらう。

近時斯學の最も大なる收獲は云ふまでもなく所謂秦器秦鏡の發見と周器の確認とに外ならない。之を住友家の藏有に照すに、愈精細ならんとする斯學の批判の從來の推定を革むるに當つて、之が年代を降されたるよりも、却つて從前の解説中往々にして假に漢作に擬せられたるものの周又は所謂秦式に上されたるの多きを見るのである。洵に世に誇稱すべき本蒐集の、之を鑽つて愈々堅きを再歎せしめる。(渡邊)

假綴四六倍判 本文二二〇頁 題及跋四頁 英文索引二七頁 圖版コロタイプ六五葉
昭和九年八月一日發行 非賣品

岡倉天心

清見陸郎著

大正十一年日本美術院から岡倉覺三氏の論說遺文を蒐集した「天心全集」が刊行され大に美術界の注目を惹いた。然しこれには天心の詳細なる傳は錄せられて無かつた。客歲東京美術學校日本畫科第一回の卒業生にして、當時親しく天心の風貌に接し得た清見陸郎氏が、「岡倉天心」と題して天心の詳しき傳記を纂錄せられたことは斯界の爲に甚だ意味あることと思ふ。氏は天心の生涯を「少年時代」、「東京美術學校時代」、「日本美術院時代」、「ポストン時代及晩年」の四時代に區分せられ、その間各々に時代的背景を加味し、多くの生々しい資料を充分に使用して理想に燃えた天心の美術界に於ける活動を遺憾なく記述してゐる。尙氏は情熱の人心の私生活にも立入つて、これに對しても充分の了解と暖き同情とを示してゐる。従つて此の書全體を通じて讀物的傾向を可なり多分に有して居り、又その據る所の資料も必しも十分を盡してゐるとは云へないが、その確實なることは何より喜ばしい。

卷末に附録として天心の英文著作「東洋の理想」一九〇二年發行 日露戰爭當時ニ

1 ヨーク・センチュリー會社より發刊された「日本の覺醒」一九〇四年發刊 及セント
ルイス萬國博覽會の際講演した「繪畫に於ける近代諸問題」一九〇四年發刊 の和譯
が掲載せられてゐる。(西村)

洋裝四六判 三一三頁 アート刷挿圖一六葉 昭和九年十月平凡社發行 定價二圓五
〇錢

平福百穂畫集

平福一郎編

百穂易實後間もなく畫集の編纂と、遺作展の開催とが計劃されてゐる由を傳聞したが、今その兩者共に完了するに至つた。畫集は登載する所百餘點、略年序に従つて配列し、百穂の三十年に亙る畫道精進の跡を詳にすることが出来る。寡作にして、しかも世を蚤うした斯人にして、これだけの作品を蒐錄すれば、その代表作は云はすもがな、その畫境の幾變遷をも悉して憾なきに庶幾しと云ふことが出来る。殊にこの畫集に於て大正年間の作品が比較的多數に收載されてゐることは注目すべきであらう。或畫人にあつてはその初、中期の作品は、晩年のその人として完成された畫境に到達するまでの發展過程としてのみ考察に値するものが尠くないのであるが、百穂にあつてはそれ以上に斯人として大體中期と區劃せらるべき大正年間の作品はそれ自身として既に充分考察に値するからである。

百穂の畫集はその生前既に二三刊行されたものがあるが、何れも片々たるものであり、この畫集に至つて初めて百穂の畫業の全豹を謬なく後昆に傳ふるものと云ひ得る。男一郎氏の執筆に係る畫伯の畫歴を付載した一文も簡にして略、要を得てゐる。尙二三收載洩れとなつた重要作品がないでもないが、それは白玉の微瑕として敢て問ふべきでないであらう。(正本)

和裝四六四倍判 帙入 コロタイプ圖版一一五葉 原色版三葉 昭和九年十一月岩波
書店發行 定價二五圓